

2016年度 社会連携研究プロジェクト活動報告書

2017年 4月 28日

和光大学地域連携研究センター
センター長 小林 猛 久 殿

代表者氏名 大 西 公 恵

研究プロジェクトの名称							
和光学園における教育実践の歴史的研究（1年目）							
研究目的							
<p>本研究の課題は、和光学園の小学校・幼稚園における教育実践の歴史的な特徴を明らかにすることである。本研究では初等教育、保育・幼児教育、共同教育という3つの実践の領域を設定し、それぞれの領域が自律性を持ちつつも相互交流し議論しながら教育実践を構築していく過程を検討する。とくに、戦後コア・カリキュラム連盟の実験校に指定されて実践を模索していく過程については、これまでの研究では不明な点が多く残されている。聞き取りや新史料の発掘により戦後初期の教育実践再開の経緯を押さえた上で、コア連との関わりを通して実践がどのように展開したのかを概観する。また、1960-70年代の実践を1990年代以降において、子どもの変化に対応しつつ消化し再創造してゆく過程を明らかにする。</p>							
プロジェクト所属メンバー（氏名の右の欄に、本学専任教員＝教、共同研究員＝共と記入してください。）							
*印は4月以降にプロジェクト所属メンバーとして加わった者							
大西 公恵	教	太田 素子	教	梅原 利夫	教	常田 秀子	教
行田 稔彦	教	後藤 紀子	教	山本 由美	教	浅井 幸子	共
大瀧 三雄 *	教	山下 暁子 *	教	奥平 康照 *	共		

<p>研究活動の経過（800字以内）（打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。）</p> <p>2016年2月から2017年3月までに、合計10回の研究会を開催し、主に2つのテーマをめぐって研究を進めた。研究会ではそれぞれ関心のあるテーマで報告を行っているが、主として①1950年代の和光学園の教育、特にコア・カリキュラム連盟へと繋がる教育認識や人脈についての研究、②小学校では80年代半ば以降、幼稚園では90年代以降の実践を手掛かりに、総合学習の思想と実践の検討を行った。</p> <p>第1回(2016.2.23)梅原利夫「和光小学校における総合学習『沖縄』が切り拓いた教育的価値」 第2回(2016.3.25)太田素子「奥平康照著『やまびこ学校のゆくえ』を読む」 第3回(2016.4.22)浅井幸子「構造化されたカリキュラム／久保田浩、小松福三、安部富士男のカリキュラム論」 第4回(2016.6.24)行田稔彦「和光小学校のカリキュラムの構造と総合学習」 第5回(2016.7.22)太田素子「<2015年度総合学習・沖縄>子どもの学習記録を読む」 第6回(2016.9.23)梅原利夫「戦後初期、学園復興期(1946～1950)の空白を埋める—1948年の「教務日誌」「日直日誌」を読む」 第7回(2016.10.28)大西公恵「近代学校における学校知識の構築—教員集団における協同的なペダゴジー形成過程」 第8回(2017.1.20)大瀧三雄・太田素子「和光幼稚園の総合的活動(「協同的な学び」)の研究」 第9回(2017.2.24)梅原利夫「和光学園戦後復興期の取り組み／その努力と苦悩から／1948年度に注目して」 太田素子「和光学園の幼児教育における総合的活動について(承前)」 第10回(2017.3.17)奥平康照「1950年代和光学園の教育実践・教育構想の可能性を探る(1)」</p>
--

この他、研究課題に関連して、以下の調査・交渉を実施した。

(1) 和光中学校第1期卒業生A氏への聞き取り調査(梅原利夫)

(2) 奈良女子大学附属小学校公開研究会への参加、同附属幼稚園の保育実践史料調査(大西公恵)

(3) 2017年秋刊行予定の著書についてレヅジョ・チルドレンと交渉を行い、P.カヴァッツオーニ氏講演記録の収録の承諾を得た(太田素子)。

研究成果の概要(1200字程度)(どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか、またそれを今後どのように活かすことができるか、など)

(1) 戦後和光学園の復興から コア・カリキュラム連盟へ

この方面の研究としては、3つの報告と貴重な資料1点の紹介がなされた。梅原報告(第6回、9回)は、1948年から翌年までの2冊の『教務日誌』を分析して校長と理事長の確執、学園紛争を紹介した。GHQが乗り込んだり、数人の教諭が学園を去ったりと、戦後の和光学園再建の産みの苦しみが掘り起こされてきた。要因については尚慎重に検討を続ける。奥平報告(第10回)は、コア・カリ連の機関誌『カリキュラム』の50年代の記事から、和光学園の教師たちの実践研究の動向を探ったもの。55年頃まで学園として統一の実践だったというよりは、多様な試みがあったという。和光の子どもは(都会っ子で)脆弱、生活を切り開く意欲を持つ子どもたちを目指すという目標設定がされた。現実生活から教育を構想するといういみで「生活学校」なのだが、大人の社会問題理解に基づく単元学習の系列案は、子どもの「問題」ではなく、大人の「問題」だったのではないかと、という問題提起があった。

大西報告(第7回)は、東京高等師範附属小学校の国語教育をめぐる議論、奈良女子師範学校附属小学校における「学習法」の学校知識論を分析し、学問知識を学校知識に再文脈化するときに、①学問知識の領域構造に縛られないか、②子どもの認識や生活にもとづく学校知識再構築理論になるのか、いずれにしても、従来の領域確定的な学校知識では、子どもの学びを促進できないと問題提起した。

なお、同窓会発行の文集『和光』創刊号が行田稔彦より提供された。所蔵印は当時和光小学校教師で、元児童の村小学校訓導の小林かねよ。『綴り方生活』『鑑賞文選』などの同人で教育史上名前の残った人物である。

(2) 1980年代後半以降の「総合学習」に関わる研究

行田報告(第4回)は、1985年度以降の和光小学校のカリキュラムの構造、なかでも総合学習・(低学年)生活勉強の教材研究と実践研究の歩みを振り返って整理した。また、教科の教育内容と総合学習の関係について、教育学者の議論や研究の現状を紹介した。大瀧報告(第8回)は、1960年代の保育実践と1980年代のそれとは、同じ総合的活動といっても性格が異なること、80年代の総合的な活動を批判的に克服する手掛かりが小松福三の実践にあるのではないかと提起。太田報告(第8・9回)は、90年代以降の子ども観の深まりが子どもの権利条約の子ども観と通底する性格を持つこと、10年に及ぶ総合的な活動の実践記録を読むといくつも理論的に研究すべき課題があるという報告があった。

また総合学習「沖縄」をめぐるのは、梅原(第1回)、行田(第4回)、太田(第5回)の報告がこれに触れており、カリキュラムの構造や「問題」の性格、教科学習と総合学習の関係などを、「沖縄」の実践に即して深めてゆく可能性も見えている。

成果の発表文献(標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等)

(発行年は厳密に2016年4月～2017年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください)

太田素子・浅井幸子編『子どもとともに創る保育—レヅジョ・エミリア・アプローチとの対話』ひとなる書房、2017秋刊行予定

大西公恵「1930年代初期における国語科の教育目的の問い直し—第34回全国小学校訓導協議会の議論を通して」『和光大学現代人間学部紀要』第9号、2016.3、pp.57-70

大西公恵「学習雑誌『伸びて行く』に見る山路兵一の「読書創造」」『学習研究』第477号、2016.1、pp.16-21

奥平康熙『「山びこ学校」のゆくえ—戦後日本の教育思想を見直す』学術出版会、日本図書センター(発売)、2016.2

※ 提出期限=2017年4月28日(金) 提出先=企画室企画係(担当:奥名)

※ 用紙が足りない場合は別紙を添付してください。

※ できるだけワープロで記入し、e-mailで送信してください。

※ kikaku@wako.ac.jp(企画係)